

平成 21 年 6 月 22 日現在

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2006-2008

課題番号：18520473

研究課題名(和文)

小中連携を視野に入れた英語の文字指導の最適時期とその指導法に関する研究

研究課題名(英文) A Study When and How to Implement the Teaching of English Letters with a View to Coordination between Primary and Secondary Education

研究代表者

中村 典生(NAKAMURA NORIO)

岐阜市立女子短期大学・英語英文学科・准教授

研究者番号：70285758

研究成果の概要：

独自の語彙習得モデルを定式化し、その枠組みを用いて小学校英語における文字指導は、音声にたっぴりなれ親しんだ後に始める必要があることを統計を用いて明らかとし、また語に関する技能は互いに関連し合っていることを明らかとした。さらに学習段階の初期において、文字は「話す」助けにはなるが、「聞く」助けにはならないことも明らかとした。

交付額

(金額単位:円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	900,000	0	900,000
2007年度	600,000	180,000	780,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,200,000	390,000	2,590,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：英語教育・小中連携

1. 研究開始当初の背景

平成 14 年度より総合的学習の時間の国際理解の一環として、公立小学校で英語活動が始まり、平成 17 年度の調査では全国の 92% の小学校で何らかの英語活動が行われるに至り、今後の小学校英語の教科化、必修化の議論が盛んに行われていた。また、平成 17 年に文部科学省中央教育審議会初等中等教育分科会から「小学校の英語教育に関する意識調査結果」の結果が示され、「英語を読むことがうまくできないから」という回答が英語活動が嫌いな理由の一位となった 1997 年中教審の答申以来、文部科学省は、一貫し

て基本的には文字を用いない方針を打ち出してきたが、このアンケートを見る限り、文字がすでに小学校に入り込んでおり、英語嫌いを生み出す原因にもなっていることが明らかとなった。

以上のような結果も引き金となって、英語の文字指導をいつから、どのような形で行うべきか、ということが、早急に解決しなければならない問題である、と考えられるようになった。となっていることがわかる。しかしこの問題には様々な要素が絡み合っており、議論が噛み合わなかったり、はっきりわからないことも多いという状況であった。

当時の文字指導に関する問題点を整理すると次のようになる。

- (1)「文字がわかる」ということばが曖昧なまま使われている。たとえば単にアルファベットの読み書きができることと、英語の文字のかたまりを読み書きできることは質的に違うが、その差を明示できていない。つまり、児童の文字能力のレベル分けをし、その文字能力の差が音声中心の英語学習にどのような影響を及ぼしているかを考える必要があるが、文字能力を測るスケール自体がないため、「文字がわかる」の意味が曖昧なまま、噛み合わない議論がなされている。
- (2)小中連携を視野に入れた文字指導の議論ができていない。ともすれば文字を導入した時点で、音声中心の英語学習が文字中心に移行してしまう危険性があるにもかかわらず、小学校では単に児童が文字を求めるからと言って、安易に与えてしまうことも見受けられる。本来は小中連携や適期教育の観点から、どの時期にどういう形で文字を導入すれば、その後の実践的コミュニケーション能力育成に有効かという議論をすべきであるが、それができていない。

2. 研究の目的

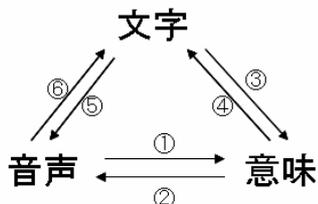
本研究では以下の2点を研究目的とした。

- (1)文字能力を測ることができるスケールを提案し、どの程度文字がわかるか、という程度をレベル分けできるようにする。これにより、文字能力が音声中心の英語学習にいかなる影響を及ぼしているかを明らかにする。
2. 上記のスケールを用いて得られたデータを参考にして、小中連携を視座に、どの時期にどういう形で文字を導入・指導すれば、その後の実践的コミュニケーション能力育成に有効かということを明らかにする

3. 研究の方法

主な方法は日本各地、また韓国の様々な小学校において、語彙に関するアンケートを実施することである。

このアンケートは、中村(2006)などで提案された、以下の語彙習得モデル(以下、多角的語彙習得モデル)をもとづいて作成される。



このモデルでは、語が意味・音声・文字という3つの素性からなり、これら素性間の対応関係の技能を習得することが語彙習得の一面であると捉えられている。またこのモデル

では、～の対応関係は語彙に関する技能であり、それぞれ個別に習得されるものとされている。各技能が意味することは以下の通りである。

音声から意味：語の発音を聞いて、その意味がわかる

意味から音声：意味(実物、絵、写真などのイメージ)を音声化できる

文字から意味：英語のスペリングを見て、その意味がわかる

意味から文字：意味(実物、絵、写真など)から英語のスペリングがわかる

文字から音声：語のスペリングを見て、それを音声化できる

音声から文字：語の音声を聞いて、英語のスペリングがわかる

アンケートは多角的語彙習得モデルに対応している。つまり、(i)実際に単語の音声を聞いてその意味がわかるかどうか()に対応)、(ii)単語の音声を聞いてスペリングがわかるかどうか()に対応)、(iii)単語の意味を母国語で示しそれを英語で言えるかどうか()に対応)、()単語の意味を母国語で示しそれを英語で書けるかどうか()に対応)、()単語のスペリングを示しその意味がわかるかどうか()に対応)、()単語のスペリングを示しそれを英語で言えるかどうか()に対応)である。アンケートは児童がわかれば をわからなければ×をつけてもらう形式である。(なお韓国でも調査を行ったが、かかる時間の関係で、韓国では の技能に関する調査しか行うことができなかった。)

調査に用いた30語は以下の通りである。

morning, night, apple, watermelon, teacher, dentist, spring, winter, pencil, eraser, onion, carrot, bicycle, train, cow, pig, sunny, rain, mouth, arm, chopsticks, dish, father, grandmother, bathroom, garden, mountain, river, hat, watch,

実際に実施したアンケートの一部は以下の通りである。

	えいごでいえるかな?	かけるかな?
あさ	【 】	【 】
せんせい	【 】	【 】
えんぴつ	【 】	【 】
	いみが	
	わかるかな	よめるかな
teacher	【 】	【 】
watch	【 】	【 】
onion	【 】	【 】

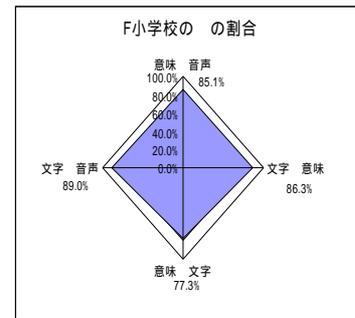
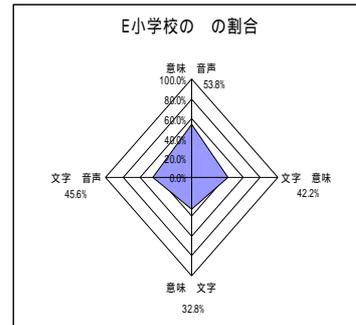
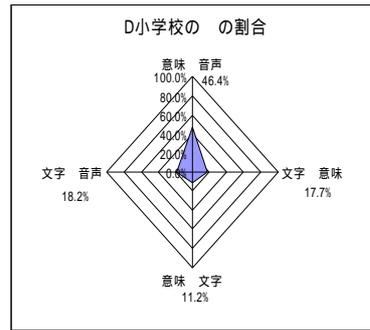
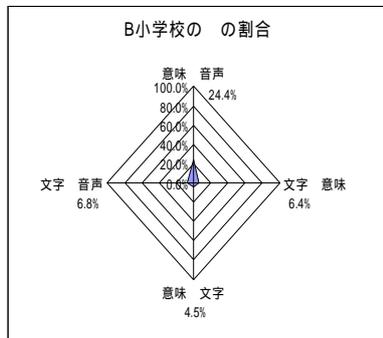
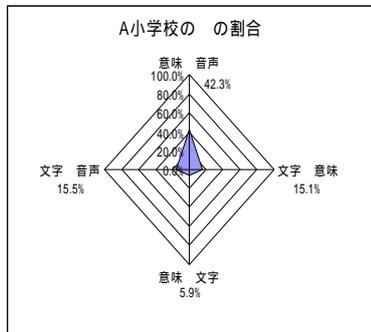
	영어로 말할 수 있습니까? ㅏ 수 있습니까?	
아침	【 】	【 】
선생님	【 】	【 】
연필	【 】	【 】
	한국어로 무슨 뜻인지 아세요? 영어로 읽을 수 있습니까?	
teacher	【 】	【 】
watch	【 】	【 】
onion	【 】	【 】

(以上のアンケートの他に、指導者に対するインタビューや、ソフトウェアを用いてテスト形式で語彙調査を行ったりもしたが、ここでは割愛する。)

4. 研究成果

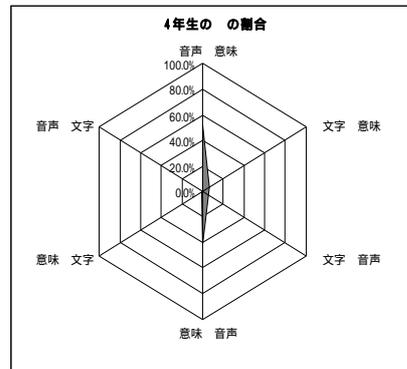
3. で示した方法にしたがって日本と韓国、約 3,000 名の児童を対象に実施した語彙アンケート調査の主な結果は以下に示す。

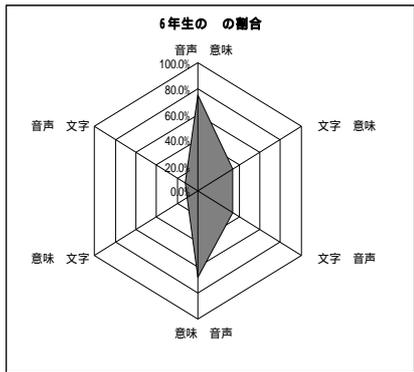
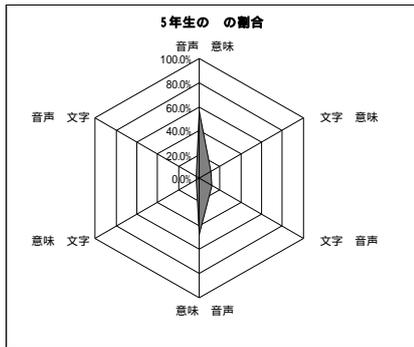
以下は日本の小学校と韓国の小学校の比較である。なお、A・B・D小学校は日本の小学校、E～G小学校は韓国の小学校であり、A小学校は年間 35 時間、B小学校は年間 15 時間、C小学校は年間 35 時間(特区、現在の教育課程特例校)、D小学校は年間 34 時間、E小学校は年間 68 時間それぞれ英語活動を行っている。



以上のレーダーチャート中の%は、すべての児童がすべての語に対して「知っている」につけた場合を 100%として算出したものである。韓国の方が、すべての語彙技能において、日本より習得がすすんでいることが明らかとなった。

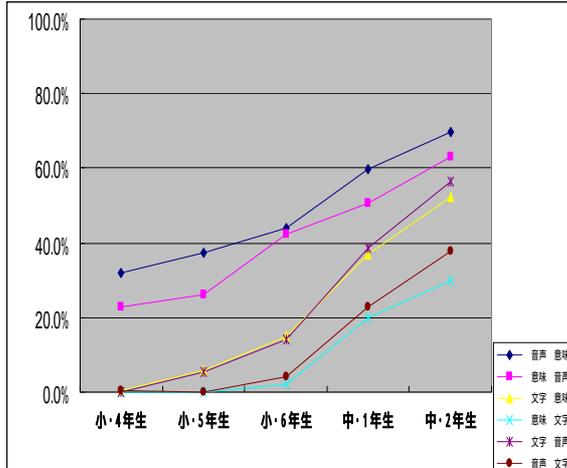
また、学年によって、語彙技能の習得がどのように進むか、ということを示した一例が以下の図である。





また、ある小学校出身者の小学校4年から中学2年までの習得語彙技能の推移は以下の通りである。

	①音声・意味	②意味・音声	③文字・意味	④意味・文字	⑤文字・音声	⑥音声・文字
小・4年生	32.0%	23.0%	0.4%	0.2%	0.0%	0.4%
小・5年生	37.4%	26.2%	5.8%	0.0%	5.4%	0.0%
小・6年生	43.9%	42.4%	14.8%	2.1%	14.0%	4.2%
中・1年生	59.6%	50.7%	37.0%	19.9%	38.8%	22.9%
中・2年生	69.7%	63.0%	52.3%	29.8%	56.3%	37.7%



以上より、明らかとなった結果は以下の通りである。

(1) 多角的語彙習得モデルの から の語

- 彙技能習得は、
- の順序ですすむ傾向がある
- (2) と の技能習得には高い相関性がある
- (3) 文字を含まない の技能が十分に習得されずに、文字を含む の技能を習得しようとする、学習障害を引き起こす要因にもなる
- (4) 文字は の単語の発音に関する技能習得には寄与するが、 の聴く技能の習得にはほとんど寄与しない
- (5) 意味を伴わない や の技能習得に偏ると、学習障害を引き起こす可能性がある。(6) 以上(1)~(5)の結果から鑑みて、音声に十分慣れ親しむことなしに「偏った」文字指導を行うと、音声中心の小学校英語の障害となることが考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計5件)

中村典生、林田宏一、樽見清栄、語彙習得から見た小学校英語の成果と学校間におけるその格差に関する研究、言語文化学会論集、第28号、pp.39-52、2007年5月、査読有

中村典生、林田宏一、語彙アンケートから見た日本・韓国の小学生の語彙習得の傾向、小学校英語教育学会紀要、第8号、pp.89-96、2008年3月、査読有

中村典生、ローマ字と小学校英語教育、岐阜市立女子短期大学研究紀要、第57号、pp.19-27、2008年3月、査読有
 Randall Cotten、中村典生、Global Understanding as a Motivational Factor、岐阜市立女子短期大学研究紀要、第57号、pp.13-18、2008年3月、査読有

中村典生、末松綾、林田宏一、小学校英語における文字指導とその課題 - 英語ノート(試作版)の内容を踏まえて -、小学校英語教育学会紀要、第9号、pp.63-70、平成2009年3月、査読有

〔学会発表〕(計5件)

(口頭発表)

中村典生、林田宏一、小学校英語における文字指導について、小学校英語教育学会第6回全国大会、2006年7月、

中村典生、研究結果から得られた文字指導のヒント、小学校英語教育学会東京支部研究大会、2007年1月

中村典生、永井一次、音声認識ソフトを用いた小学生に対する語彙指導・文字指導外国

語教育メディア学会第 47 回全国研究大会、
2007 年 8 月、

中村典生、林田宏一、語彙アンケートから見た日本・韓国の小学校における語彙習得の傾向、小学校英語教育学会第 7 回全国大会、
2007 年 8 月、

中村典生・末松綾・林田宏一、小学校英語における文字指導とその課題 - 英語ノート（試作版）の内容を踏まえて -、小学校英語教育学会第 8 回全国大会、 2008 年 7 月、

〔図書〕(計 2 件)

中村典生(他 44 名) 小学校英語への文字導入についての考察、in 言葉の絆(卯城祐司・太田一昭・太田聡・滝沢直宏・田中伸一・西田光一・山田英二編) 開拓社、pp. 587-601、
2006 年 10 月

中村典生(他 6 名) 小学校外国語活動実践マニュアル、(松川禮子・大城賢 共編著) 小学校での文字指導について、pp. 103-111、先行実践校のケースから学ぶ-英語活動を実施していなかった小学校、pp. 114-128、旺文社、平成 20 年 9 月

6 . 研究組織

(1)研究代表者

中村 典生 (NAKAMURA NORIO)

岐阜市立女子短期大学・英語英文学科・准教授

研究者番号: 70285758